

東海湖盆の古地理 - 伊勢湾西岸を中心に -

最後に話全体のまとめということで、東海湖盆（東海層群の堆積盆地という意味です）の古地理の移り変わりを、伊勢湾西岸地域を中心にして述べます。

この地域の東海層群の堆積過程は、図2・1の全体の対比図と図2・3と図2・4の地質図を見て、どの層準の累層がどの場所に分布しているかみれば、大体の見当がつきます。つまり、東海層群下部は亀山地域に、東海層群中部から上部は北勢盆地構造周辺に、東海層群最上部は多良地域に分布していますから、東海湖盆はまず亀山地域南部で沈降が始まり、沈降域は北に移動してやがて北勢盆地構造域に達し、最後に養老山地と鈴鹿山脈北部に挟まれた地域に達した、とすることが出来るでしょう。

このような見解は、すでに何人もの研究者によって述べられてきたところで、確かに大局的にはその通りなのです。しかし、図2・12と図2・13の御在所山地域の地質図と層序断面図をみますと、ここでは単純に南から北に向かって、下位 上位といった具合に堆積しておりません。逆に北から南に向かって堆積している場所もあります。ですから、単純に南から北へと一様に移動した、と即断するわけにもいかないのです。

ところで、この地域の東海湖盆の古地理を具体的にお話しする前に、ちょっと触れておきたいことがあります。だいたい古地理を復元する手段にはいろいろあるのですが、私の場合、まず各累層をつくる堆積物が、どこから来たかという点から検討を始めました。このことを推定する手段はいくつかありますが、基本的にはその累層がどのような層相からなり、累層内部の層相が水平的にどの様に变化しているか知るのが重要です。たとえば、多良・員弁地域の市之原・大泉・多良累層などは、いずれも北から南に向かって、堆積物が細粒になっています。ですからこの場合、これらの堆積物は北の方角から運搬されたということが、層相変化から判断できるわけです。さらに古流向も、堆積物の供給方向を求める上で有力な武器になります。露頭で地層を観察することができますことになりま。堆積構造には、いろんな種類があるのですが、私が古流向を得るために用いたのは、ほとんど斜交層理です。また、堆積物の供給方向や供給源を知る手段として、その累層が礫層を構成岩相として含む場

合は、礫種を調べます。そうすると、ある種の礫は、どの地層・岩体から供給されたかということが推定できます。東海層群周辺に分布する基盤岩は、図5・1のようになっておりますが、これをみていただきますと、たとえば室生火山岩・湖東流紋岩類・犬上花崗斑岩・濃飛流紋岩類といったように、岩石として識別しやすく、しかも分布の限られている岩体が周辺地域にあります。実際、礫の種類を調べていきますと、そういった特定の岩体からきたに違いない礫が、東海層群中に入っているのです。もちろん、堆積物の供給方向や供給源を求める場合、以上述べたようないろんな資料をできるだけ総合した上で、判断していく必要があることはいうまでもありません。しかしとにかく、このような資料を集めて、まず各累層の構成堆積物の供給方向（あるいは供給源）を求めました。ここでは、いちいち累層ごとに説明するわけにはまいりませんから、結論だけを図5・2の古地理図上に矢印で示しました。つぎに、東海湖盆の古地理変遷の段階をよく示すような時間面で、東海層群全体を6つにわけました。そしてそれぞれの期間内に堆積した各累層の分布域、つまり堆積域を描き、それにいま述べた各累層の堆積物の供給方向を矢印で書き加えて、6枚の古地理図を作成しました。そ

れが図5・2です。以下、6枚の図の内容について順に説明いたします。一番左にあるのが、第1期の鮮新世初頭頃の古地理図です。この時期には、松阪累層が松阪市付近に堆積しました。ですから伊勢湾西岸の東海湖盆は、松阪市付近に発生したことになります。堆積物は南あるいは南西から供給されています。第2期の鮮新世前期には、沈降域は北にやや移動し、沈降域の面積も一気に広がって、湖盆内部への堆積物の供給も強力になりました。この時期の堆積物の供給方向には、西からと北東からの2つがあり、西からの流れが小山累層・西行谷累層・楠原累層の堆積物を、北東からの流れが亀山累層下半部の堆積物をもたらしました。この時期には、約200万年の間に、1,000mぐらいの厚さの地層が堆積しています。ですからこの時期の沈降と堆積運動は、前の時期よりも非常に大きかったと想像できます。エレファントイデスゾウが息絶していたのは、この時期です。第3期は鮮新世後期前半の時期で、沈降域はさらに北側に移りました。この時期になると、北東からの流れが支配的になって亀山累層を堆積したのですが、大きな事件として、もっと北の養老山地南部と鈴鹿山脈中部に挟まれた地域、

つまり員弁地域と御在所山地域一帯の沈降が始まりました。この沈降部に堆積したのが美鹿累層・石榑累層・古野累層です。これらの堆積物は、養老山地と鈴鹿山脈の両側からもたらされました。そして次の第4期の鮮新世後期中頃になると、沈降域はもっと北へ移動しました。湖盆東側からの堆積物の供給は相変わらず続いており、暮明累層、泊および桜村累層の最下部、八王子累層、亀山累層最上部を堆積しました。またこの東側からの流れとは別に、北からの堆積物の供給もありました。この北からの流れは2つあり、養老山地側からのものが市之原累層を、鈴鹿山脈側からの流れが多志田川累層を堆積しました。第5期は、鮮新世後期後半から更新世前期前半に当たります。この時期になると、沈降域はもっと北側に移動したのですが、面積自体は第4期よりも狭くなりました。湖盆東側からの堆積物の供給はだいぶ北よりになり、桑名市付近の大泉累層や、泊及び桜村累層主部を堆積しました。鈴鹿・養老山地からの流れは、ちょうど2つの山系の間を通るようになり、多良累層主部と大泉累層を堆積しました。また、鈴鹿山脈中部では西からの供給があり、湯の山礫相を堆積しています。アカシゾウが歩き回っていたのは、この時期になります。

第6期の更新世前期後半になりますと、沈降域はこの地域では、鈴鹿山脈と養老山地の間に限られるようになりました。北からの流れは、多良累層最上部を堆積した後、もう堆積物を供給することはなくなりました。かわりに、鈴鹿山脈北部から堆積物が供給されるようになって、米野累層が堆積しました。この地層が東海層群の最後の地層で、私の話もこの辺で終りになります。

図5・1 - 伊勢湾周辺の基盤岩の分布

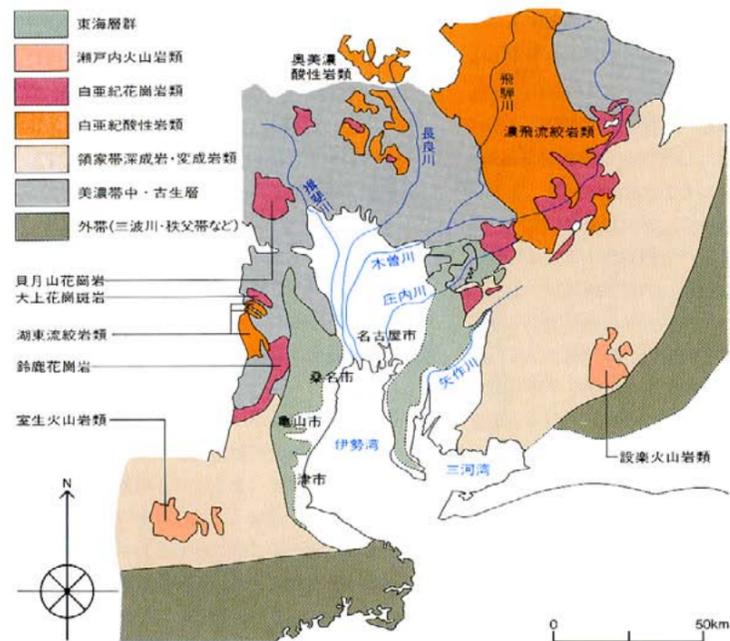


図5・2 - 伊勢湾西岸の東海湖盆の古地理変遷

